

賑わいの創出を目的とした公共施設の整備 — 海南市民交流施設「海南nobinos」の整備事例から —

Installation of public facilities for the purpose of creating bustle

— A Case Study of Kainan Civic Plaza & Library “Kainan nobinos” —

宇尾 崇俊^{1, 2}

¹海南市まちづくり部都市整備課, ²2022年度和歌山大学紀伊半島価値共創基幹 価値共創研究員

2020年に開館した、図書館機能を中心とした「海南nobinos」は、「賑わいの創出」を最大の目的として整備した結果、人口10万人規模の自治体の公共図書館の中では全国第3位の来館者数となっている。

本施設の整備の経緯と設備の内容を整理し、開館後に行ったアンケート調査の結果から、どのような点がどのような利用者層に評価されているのかを把握し、公共施設の整備において必要な視点と課題について考察する。

キーワード：公共施設、公共図書館、賑わいの創出、施設整備のコンセプト

1. はじめに

2020年6月1日、旧海南市役所及び児童図書館等の跡地に海南市民交流施設「海南nobinos」が開館した。

同施設は、南海トラフ巨大地震による津波被害などに備えて、高台に移転した旧海南市役所の跡地に整備された、図書館機能、市民活動・生涯学習活動支援機能、子育て支援機能、カフェ、広場を備えた複合施設¹⁾であり、基本計画の策定に携わった民間事業者が設計への助言を行い、開館後の運営までも担う前提で整備全般に関わりながら事業が進められた。

開館から1年7か月（584日）後の2022年1月17日、累計来館者数100万人を達成した同施設は、人口10万人規模の自治体における公共図書館の中で全国第3位の来館者数²⁾となっており、『海南市庁舎跡地活用基本方針』で定められた、賑わいの創出という施設の整備目的を達成したと言える。

近年、市民が利用する公共施設の整備においては、その目的の一つとして「賑わいの創出」が掲げられることが非常に多い。県内では同時期に「和歌山市民図書館」（2020年6月5日、和歌山市）、「道の駅 四季の郷公園FOOD HUNTER PARK」（2020年7月18日、和歌山市）、「田辺市市街地活性化施設tanabe en+」（2020年8月10日、田辺市）などがオープンしているが、いずれも賑わいの創出や地域の活性化を目的としており、運営に民間事業者が携わっている点も共通している。

地方自治体では、高度経済成長期に集中的に整備された公共施設の老朽化対策や維持管理、更新の在り方

等が課題となっており、施設の更新・統廃合・長寿命化などの取組みを進めているが、当時の施設が賑わいの創出を目的として整備されたものでなかったことは想像に難くない。

その後、少子高齢化や人口減少など、社会構造の大きな変革期を迎える中で、公共施設の設置目的である「住民の福祉の増進」の中に、地域活性化の概念が強く含まれるようになり、所謂箱物批判を避けるためにも、耳触りが良い「賑わいの創出」という言葉が多用されるようになったものと考えられる。

しかしながら、「賑わいの創出」とは非常に曖昧で、幅広い解釈が可能な言葉であることから、設置主体である地方自治体が具体的なビジョンやターゲットを明確化できない可能性があり、地方自治体が本質を捉えられていなければ、協働して携わる民間事業者も的確な提案をすることができない。整備に先駆けて策定する基本計画等においても、整備方針や理念が明文化されるが、「賑わいの創出」と同様に、幅広い解釈が可能で抽象的な表現となりがちである。結果、総花的で中途半端な施設が出来上がることとなり、本来の狙いを達成することが困難となってしまう。

なお、賑わいの指標としては、当然、来館者数が重要指標となるが、単に訪問者数が多ければ良いというものではなく、地元商店街の売上増や観光客の誘客、地域住民の居場所づくりや利便性の向上など、施設の特長や位置づけ、施設整備によって解消しようとする地域課題等を踏まえ、施設整備のコンセプトを明確化することが重要と考える。

本稿では、2016年の『(仮称) 市民交流施設整備基本計画』の策定から設計、施工、開館後の運営まで同施設の整備に携わった筆者の経験及び検討の経過を整理し、図書館機能を中心とした公共施設整備における民間事業者との関わり方、また、居場所としての評価を踏まえ、公共施設整備の在り方について考察する。

2. 公共図書館を取り巻く背景

我が国の公共図書館については、静かで多数の蔵書が整然と並び、住民が無料で本を借りられるというイメージが広く共有されているが、戦前戦中には思想善導機関として位置付けられ、入館や貸出が有料であったり、国策に沿わない図書の検閲、閲覧禁止措置がとられたりするなどしていた³⁾。その後、個々人が自由な思考と判断を行うための資料を提供する場所として公共図書館のあり方が位置付けられ、1954年には日本図書館協会の綱領として「図書館の自由に関する宣言」が打ち出され、各自治体に図書館が設置されることとなった。

また、日本図書館協会図書館政策特別委員会が1989年1月に公表(2004年3月改訂)した「公立図書館の任務と目標」には図書館システム整備のための数値基準として、人口毎の延床面積、蔵書冊数、開架冊数、資料費、年間増加冊数、職員数が提示されているが、この数値は全国の市町村の公立図書館のうち、人口一人当たりの資料貸出点数が多い上位10%の図書館の平均値が基準とされたものであり、これは目標値ではなく達成すべき基準値であると記載されるなど、限られた予算の中で運営される地方行政においては、非常に厳しい数値であると言わざるを得ない。資料貸出点数が多い上位10%の図書館の数値を基準としている点については、貸出冊数至上主義と言われる批判に通ずるものがある。

図書館の利用実態を表す尺度としては、蔵書冊数や貸出点数のほか、来館者数、登録者数、利用者数が用いられることが多い。毎年日本図書館協会が実施している公共図書館調査においては、有効登録者数(調査年度内に図書館を利用した登録者の実人数)についても調査されているが、何をもち「図書館を利用した」と見做すかの定義がなされておらず、『日本の図書館統計と名簿2019版』によると、有効登録者数について回答のあった1,906館のうち204館は登録者数と有効登録者数が同数であるなど、現時点では図書館の利用実態を正確に把握するためのデータとは言い難い。

そこで、海南市の既存図書館(下津図書館と児童図書館の2館。うち児童図書館は海南nobinosの開館に

伴い2020年閉館。)における2015年度の利用者数42,024人のうち、同年度中に一度でも図書を借りたことがある実利用者数を調査したところ5,875人、うち海南市在住者は5,226人であった。当時の海南市の総人口は53,055人¹⁾であったことから、仮に「図書館の利用」を「図書を借りる」と定義した場合、「1年のうち、図書館を利用した海南市民は約1割しかいない」「約1割のヘビーユーザーが平均年7~8回利用している」状況であったとすることができる。

その一方、公共施設の整備に際して「図書館は集客力がある」と言われることが多いが、民間の商業施設を上回る集客力を持つわけではなく、あくまで他の公共施設と比較した場合に、不特定多数の集客が見込めるという話である。その一方、従来の図書館利用者は少数利用による静かな空間を好む施設であるため、留意が必要である。

3. 基本計画までの経緯と整備方針

海南市では、2012年から老朽化が進む市庁舎の建て替えについて検討を開始しており、学識経験者や各種団体代表等から構成される海南市庁舎検討懇話会において、「(庁舎が中心市街地に立地していることから)庁舎移転により市民の利便性及び賑わいの低下を招かないよう、支所機能を含め、市庁舎跡地の有効活用が必須である」との意見が出された⁴⁾。

また、2014年には各種団体の代表者や公募委員から構成される海南市庁舎跡地活用懇談会を開催し、市民の意見を踏まえつつ、跡地活用の在り方について意見を聞き、2016年3月には、図書館機能を中心として、子育て支援機能、公園等を備えた(仮称)市民交流施設を整備し、賑わいの創出を施設整備の最大の目的とすることなど、施設整備の基本理念や整備方針が「海南市庁舎跡地活用基本方針」として取りまとめられた。この中では、敷地に隣接する市民会館の老朽化が進んでいるため、市民会館を解体し、市民活動・生涯学習活動支援機能を持たせることも明記されている。

2016年4月に海南市が実施した「庁舎跡地活用事業(市民交流施設整備事業)に伴う民間事業者公募事業」では、施設整備に係る基本計画の策定から、市が行う設計業務への助言、施設完成後の指定管理者としての管理運営まで、一連の取り組みに携わる民間事業者を公募し、図書館向け書籍販売や図書館管理業務の受託などを行う株式会社図書館流通センターを選定した。

基本計画の策定業務は、受託者である図書館流通センターが実務を行ったが、同社が提案する先進事例の分析、3回に渡る参加者公募型市民ワークショップの

開催、利用者アンケートの実施だけでは、図書館等に
関心がある層、既に利用している層の意見しか汲み取
れないと考え、筆者が市内の小中高校生及び和歌山大
学観光学部生などを対象に、新しい施設にはどのよう
な機能が欲しいか、普段図書館を利用しない理由も含
めて直接意見聴取を行うこととした。

以下、その後の整備方針に大きな影響を与えた意見
を挙げる。

- スターボックスを入れて欲しい。(小学生)
- 図書館では騒いだら大人に怒られるというイメージ
がある。(中学生)
- 専門書には興味が無い。見たこともない。(中学生)
- 地域の人と一緒に将棋を指すなど、交流できると良
い。(中学生)
- 幼児用の遊び場があっても中学生が占拠してしまわ
ないか心配。代わりに身体を動かせる設備があれば
良い。(中学生)
- 公共施設は入った瞬間に静かにしなければならない
と思ってしまう。(高校生)
- 雑誌は普段自分では買えないマニアックなものが読
みたい。(高校生)
- 図書館に対しては喋ったら怒られるというイメージ
がある。小学校の課外授業でもそのように習った記
憶がある。(大学生)
- 地元の図書館では、会議室がガラス張り、中でな
にをやっているのか見えて興味が湧いた。(大学生)
- 公共施設はグサイ。ルールを書いた貼紙が多く、ス
タッフも笑っていない。同じ家具が並んでいると息
苦しくなる。(大学生)
- 図書館へ子どもを連れて行きたいが、小さい間は
大きな声を出したり、泣くことも多いので、周囲に気
兼ねしてしまう。(主婦)
- 近年は先天盲(産まれてから3歳までに全盲となっ
た視覚障害者)が少なくなり、点字を覚えることが
少なくなっているため点字図書は不要ではないか。現
在は録音図書が主流となっている。点字を読める視
覚障害者より、点字翻訳のボランティアの方が多い
のではないか。(視覚障害者)

いずれも、従来から図書館を利用していない層の意
見である。その一方、図書館流通センターからの提案
や、ワークショップ参加者、従来の図書館利用者から
出された意見は下記の通りであった。

- 入門書から専門書まで、分野別に奥行きのある蔵書

構成。

- いつ行ってもレファレンスサービスを受けられる。
- 静かに読書に集中できる空間。
- 洋書、専門書中心のコーナー。
- 地域のことを深く知ってもらう歴史資料コーナー。
- 図書館友の会の設立、市民参加型の図書館運営。
- 医療機関との連携による医療情報の提供。
- 視覚障害者のための対面朗読室の設置。
- おはなし会や読み聞かせ講座の開催。
- 郷土の歴史や文化を引き継ぐ場。人生の先輩の話を
聞く場。
- 郷土関連(うるしなど)の食器を使う飲食店。
- 高齢者向けの健康遊具。

従来からの図書館利用者層や図書館運営の専門企業
である図書館流通センターの意見からは、「公共図書館
はこうあるべき」というイメージが強く感じられ、新
規利用者層の開拓に繋がるような提案は見受けられな
かった。

図書館機能を中心とした複合施設の整備により、市
庁舎移転後の賑わいの創出を目指す中で、従来の図書
館利用者が望む図書館を整備しても、市民の1割程度
の来館しか見込むことができない。従来の図書館利用
者層を否定するわけではないが、海南市には、本施設
整備後も蔵書冊数約10万冊の海南市下津図書館が存続
し、本施設から直線距離で約7kmの地点に和歌山県立
図書館が所在する立地であったことから、本施設は「図
書館への入り口」と位置付け、これまで図書館を利用
していなかった残り9割の層が行きたくなる施設を目
指して整備を進めることとした。

その中でも、対象敷地内には従前、児童図書館が存
在していたことや、子育て支援機能を備えた施設であ
ること、また2011年に不動産ポータルサイトが選定
する「関西の出産・子育てにあたたかい街ランキング」
で海南市が1位に選ばれた経緯等を踏まえ、子どもと
子育て中の保護者を主要ターゲットとして設定した。

なお、海南市内における2015年の年少人口は5,659
人であるが、隣接する和歌山市と合算すれば50,178人
となる^[2]。本施設の立地が和歌山市寄り(市境まで直
線距離で約1.6km)であることを踏まえ、和歌山市南
部の子育て世帯の需要は十分見込むことができると判
断した。

これにより、来館者数による賑わいの創出だけで
なく、来館者の居場所としての居心地の良さを体現し、
子育て支援の充実した自治体であるというブランディ
ングによる子育て世代の移住定住に加え、市外からの

来館者が羨む施設とすることで、シビックプライドを醸成し、Uターン人口の増加を目指すことを施設整備のコンセプトと位置付けた。

4. 実装した設備内容与设计の考え方

同施設の建築工事設計業務については、2017年8月、指名競争入札により、株式会社東畑建築事務所大阪事務所が請け負うこととなった。前章で述べた施設整備のコンセプトを具現化するため、設計には同社に加え、グラフィック・インテリア・ランドスケープ・遊具に関わる4者のデザイナーから成るデザインチーム^[3]を組成して取り組むこととした。

以下に、本施設における主要な設備内容と、整備の狙い、設計の考え方等について挙げる。

4.1 絵本の開架冊数5万冊

人口5万人の地方都市において、図書館で賑わいを創出するためには、市外からの誘客が必須となる。そのためにはまず話題性が必要であり、敷地内に児童図書館があったことを参考に、絵本の冊数が訴求力を持つのではないかと考えた。国内の自治体が運営する公立図書館における絵本の蔵書冊数を調査したところ、2016年3月31日現在で大阪市立中央図書館が124,475冊、大阪府立中央図書館が61,580冊、東京都立中央図書館が48,000冊であることが分かった(国立国会図書館国際子ども図書館は約60,000冊)。なお、絵本の新規発行冊数は概ね2,500冊/年であり、全数購入をしている図書館も多いことから蔵書冊数で日本一を目指すことは現実的ではないと判断し、開架冊数を調査したところ、大阪市立中央図書館は1,700冊、大阪府立中央図書館は43,000冊、東京都立中央図書館では2,600冊であったことから、開架冊数日本一となる50,000冊の開架^[4]を目指すこととした。

なお、全体の蔵書構成・資料収集方針についても、基本性と広範性を重視し、図書館への入り口として「図書に触れる機会の創出」を念頭に置き、専門性は重視せず、リクエストがあれば、県立図書館など他館からの取り寄せにより対応することとした^[5]。

また、視覚障害者向けの資料としては、点字資料は収集せず、大活字本と録音図書再生機器の貸出により対応することとした。

4.2 物理的に柔らかい書架

子育て中の保護者が繰り返し足を運びたいするためには、如何に負担感を減らすかが課題となる。そのため、子どもトイレや授乳室の設置はもちろん、雨天時

の駐車場からのアクセス性、保護者にとっての安心感も重視して設計を進めた。

様々な書架メーカーが営業に来た際、感覚的にだが、必ず高価な木製書架を推奨され、決まって「木製書架の木のぬくもり、柔らかさが喜ばれる」という口上を聞いた。しかし、子育て中の保護者にとっては、木製書架ならば安心という認識にはならないものと考え、インテリアデザイナーに対し、物理的に柔らかい書架の検討を依頼した。

検討の結果、スチール製の書架の表面に布地で覆った部材を貼り付け、布地内部には型崩れを起こさない限界の範囲までスポンジを仕込んだが、実際に子どもが衝突するなどの事故を想定したものではない。あくまで、子育て中の保護者が安心感を抱くことを目的として製作したものである(図1)。

公共施設の整備の中では、各メーカーからの提案を基に検討することが多いが、一部の書架メーカーに同様の意図を伝えたものの、具体的な提案はなされなかった。市としての狙いを伝え、その意図を具現化するためにはデザイナーの参画が必須と言える。

なお、書架の下部には空調の吹出口が内蔵されており、フロア床面には吹出口が設置されないようにした。これは子どもや高齢者の転倒防止を目的としたものであり、吹出口を設置せざるを得なかったフローリングエリアにおいても、専用のスペーサーを作成することで、床面との段差を解消している。



図1 2階と3階の図書館エリアに設置した書架

4.3 日本の伝統色を基調にした色彩計画

書架だけでなく、館内外全体の色彩計画には、DICグラフィックス株式会社の『日本の伝統色』⁵⁾を採用した。

その背景には、公益財団法人図書館振興財団が主催する「図書館を使った調べる学習コンクール」へのアンチテーゼがある。図書館業界が、図書館を使った調べ学習を推奨し、また、レファレンスサービスの活用

にも繋げようとする意図を否定するものではないが、これまで図書館を利用していなかった層は、「コンクールに参加するために、何を調べたいか考えよう」という状況に陥ってしまうものと思われ、施設の設計を進める中では、来館者が様々なものに興味関心を抱く切っ掛けを仕掛けとして組み入れたいと考えた。

『日本の伝統色』は、300色の日本古来の慣用色から構成されており、石竹色や鶺鴒色、群青色、赤蘇芳、璃寛茶のように、動植物や顔料、染料、文化など、それぞれの由来文が記されている。これらに興味を持ち、詳しいことを知りたくなった時に、植物図鑑や鉱物図鑑、様々な図書を手にして自分で調べられる環境を作っておくことが、自然と図書館で調べものをするという行為に繋がって行くことを企図したものである。

そのため、グラフィックデザイナーとともに、17色の「海南の伝統色」を選定し、館内外の色彩計画の核とした。「海南の伝統色」は、海南市の伝統、文化、名所、物産などを基に抽出しており、館内にはこれらをピクトグラム化して掲示し、DICグラフィックス社からは、日本の伝統色に準拠した建築物として認定^[6]を受けている(図2、図3)。



図2 海南の伝統色のピクトグラム



図3 海南の伝統色の色名と由来文

また、この施設を日常的に訪れている子どもたちが将来、何らかの折に日本の伝統色に触れ、海南市のことを思い出し、郷里への愛着を感じてくれることも企図している。

4.4 音を許容する空間

前述の通り、非図書館利用者層にとっては、図書館では静かにしなければならないという点が心理的なハードルになっていることが分かった。下津図書館員からも、小学校の社会科見学において、図書館の入口前で教師が「ここから先は図書館なので静かにすること」と注意している風景をよく見かけるとの話があり、また、小さい子ども連れの利用者からは「子どもと一緒に絵本を選びたいが、小さな子どもが静かにし続けることは難しく、他の利用者のことが気になってすぐに出てきてしまう。そういう意味では、利用者層が限られている児童図書館の存在はありがたかった。」という声も聞かれた。加えて、下津図書館2階の学習室では、閉鎖空間のため、別の利用者の立てる些細な物音に対するクレームも度々発生していたことから、2階メインフロアを区切ることなくカフェエリアを設け、来館者が静けさに注意を払わなくともよい空間を演出することとした(図4)。



図4 2階メインフロア中のカフェエリア

その一方で、一般書フロアである4階は色のトーンを変えることで、子どもでも静かにすべきエリアであることが分かるようにした。これにより、階段を駆け上がってきた子どもたちが、突然ゆっくりと歩き始め、静かに行動する様子が確認されており、注意書きを貼る必要も生じていない。

4.5 様々な名作家具に触れる機会の創出

意見聴取の中で、「公共施設はダサイ。同じ家具が並んでいると息苦しくなる。」という意見があった。公共

施設における物品の調達に際しては、その原資が公金であるため、入札における公平性はもちろん、市内業者が入札に参加できる機会を担保することも重視される。市内業者によっては、特定のメーカーでなければ取引できないという状況もあることから、主要なメーカーの製品であれば代替できる前提の入札とされることが一般的であるため、どのメーカーでもラインナップしているような、特徴のない、無個性な製品が選定されることが多い。

しかし、本施設においては子どもをメインターゲットとする中で、地方都市ではあまり触れることがない、様々な上質な家具に触れる機会を提供することも公共施設の役割だと考え、指定品入札とした。

開館後、様々なチェアが並ぶ4階のラウンジ席などにおいて、利用者がそれぞれのチェアを座り比べながらお気に入りのチェアを探す様子も見受けられ、老若男女問わず、人気のエリアとなっている（図5）。



図5 様々なチェアが並ぶ4階のラウンジ席

4.6 常設託児室と乳幼児用の遊び場、授乳室、ランチスペース

本施設には常設の託児室があり、図書館流通センターの子会社である株式会社明日香が運営している。週に一度の休止日を除いて保育士が常駐し、施設利用者が2時間単位で子どもを預けることができる。運用規定を検討する中で、運営会社からは効率的に運営するため予約制にした方が良いとの助言があったが、市側から非予約制とすることを求めた。

予約制とした場合、保護者にとってはその時間にその場所へ行かなければならないという義務感が生じてしまう。対象が乳幼児であるため、外出時にぐずって時間通りに出発できないことも容易に想定され、子育て中の保護者に一人でゆっくりできる時間を提供するという本来の目的が達せられないことから、非予約制とした。開館後、利用者からは「予約制ではないので

気軽に利用できる。（預かることができる子どもの）定員により利用できない場合も、特に落胆することもない」という声が寄せられ、運営側の目線で利用規定を定める危険性を改めて認識した。

2階絵本ゾーンの中央には、ランチスペースと呼ばれる小上がりを設置し、飲食可能としている。午前中から昼食時には、子ども向けの小さなお弁当を持ち込む母親の姿が見られ、そこで出会った母親同士の交流にも繋がるなど、本施設で目指した子育て支援の在り方^[7]が実現している（図6）。



図6 2階ランチスペース

なお、休日には、子どもに絵本を読み聞かせる父親の姿を見て、触発された別の父親が読み聞かせを始める様子も見受けられ、このような環境を作ることで、積極的な行動を誘発することができている。

加えて、子守りのための施設利用を想定し、収集する雑誌のタイトルについても、保護者層が好みそうな趣味のものを中心とした。目を離せる年代以上の子どもについては館内で自由にさせ、保護者はゆっくり雑誌を読んでいる様子が見受けられ、子守りの負担軽減を図ることができたと言える。

4.7 254席のホールと控室

老朽化した市民会館を解体し、本施設に市民活動・生涯学習活動支援機能を持たせることを前提として本事業は進められたが、市民会館に存在していたホールの扱いについては、市議会庁舎跡地整備特別委員会でも大きな議論を呼んだ。当初は、500～600席規模のホールを望む声が大きく、座席の形状や音響設備の在り方についても様々な意見が出された。

席数については、公益社団法人全国公立文化施設協会より提供された、人口10万人未満の市・特別区及び町村等における固定席100席以上の全公立文化施設における「席数、ホール稼働率」のデータを分析したと

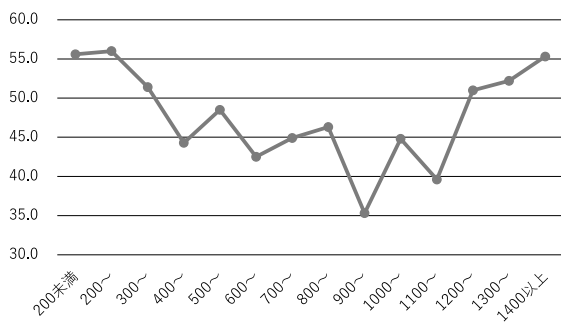


図7 ホール席数と稼働率の相関関係 (2014年)

ころ、図7のように、席数200～300人規模のホールの稼働率が最も高いことが分かった。

座席の形状については、階段状の固定席、移動観覧席、平土間+椅子の3パターンが検討されたが、既存の市民会館における利用状況から、平土間での利用が多いものの、発表会等で使用する利用者からは椅子を並べる手間が課題となっているとの意見も寄せられた。そのため、200席の移動観覧席を導入し、54席分の椅子を並べて計254席とした。(平土間、テーブル+椅子での利用も可能。図8)



図8 ノビノスホール

音響設備については、建築音響は音響メーカーの監修によってクオリティを高めるとともに、アンプ等の機材は専門のオペレーターでなくとも使用可能な物とすることで、利用者自身が操作することとした。

なお、使用に際しては、平日は1時間単位の時間利用及びフロアのみ、舞台のみ、フロア+舞台の利用で料金形態を変え、休日は午前・午後・夜間単位での貸出しとすることで、2021年度の稼働率は、時間単位で62.28%^[8]となっている。

また、ホール機能を持たせる場合、演者の控室が必要になることがある。下津地域に平成10年に開館した海南市民交流センターには601席のホールがあり、控室も3室あるが、その稼働率は5.0%^[9]である。

そのため、本施設においては控室機能を持たせた多目的室を整備し、配置や規模等から一般利用の需要はそれ程見込めないとの判断から、壁にはボルダリングウォール、卓球のできるテーブルを設置して、平常時は中学生等の利用を想定して無料開放することとした。現在は、卓球用具貸出しの順番待ちが生まれるなど、若年層から高い支持を得ている (図9)。



図9 控室機能を持たせた多目的室

4.8 ピロティ形式の駐車場とランダムに小分けにされた広場

本施設は津波浸水区域内に新設する公共施設であるため、国土交通省告示『津波浸水想定を設定する際に想定した津波に対して安全な構造方法等を定める件』に準じ、想定される津波の波圧に耐え得る構造体とするか、ピロティ形式とすることで津波を受け流す構造にする必要があったため、雨天時の利用についても考慮し、敷地北側の1階部分をピロティ形式の駐車場とするとともに、南側の広場部分を丘状に整備することとした (図10)。



図10 施設全景

ランドスケープデザイナーからは、丘状の広場を大小様々な段状テラスとすることで、状況に応じて利用

者が自ら棲み分けられるようになるとの意見があった。デザイナーの経験に基づいた提案であったが、施設開館後、実際にその通りの使われ方がなされている。なお、広場部分には書架の形状に似せ、日本の伝統色で塗装したFRP製のファニチャーを設置している。

複数のデザイナーが関わった施設であるが、色と形状により共通言語化を図ったことによって、施設全体のデザイン性が統一されており、この形状については、カフェカウンター上部のインテリア（カフェ運営事業者が設置）にも採用されている。

5. 利用者の評価と動向分析

5.1 アンケート調査概要

アンケート調査の概要は次のとおりである。

調査名称：『海南nobinos来館者アンケート』

調査対象：海南nobinos来館者

調査期間：2020年11月22日～30日の9日間

記入方法：自記式

配布と回収方法：スタッフによる配布と説明、記入後の回収

回収数：781名

5.2 アンケート結果

アンケート調査の結果のうち、利用者の動向が読み取れた項目は次のとおりである。

5.2.1 居住地 (n=780)

図11のとおり、海南市在住者は370人(47.4%)であり、和歌山市在住者は267人(34.2%)、その他県内が124人(15.9%)、県外が19人(2.4%)であった。

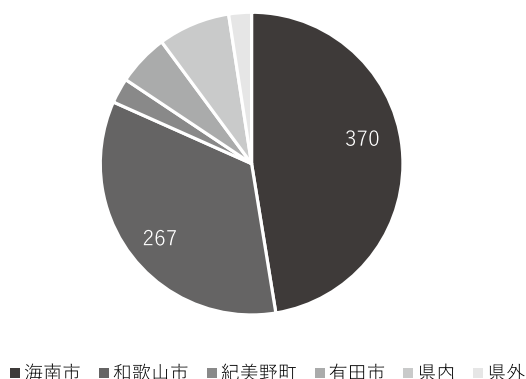


図11 回答者の居住地

5.2.2 誰と一緒に来館したか (n=781)

来館時の同行者については、表1のとおり30代40代は一人で来館していることが見て取れる。そこで、30

代40代の同行者を調べた結果、それぞれ79%、69%が子ども・家族と一緒に来館していた。

表1 来館時の同行者

子ども	130	16.6%	→	~10代	201	88.9%
家族みんなで	125	16.0%		20代	40	60.6%
友人(グループ)	242	31.0%		30代	21	15.9%
ひとり	225	28.8%		40代	41	33.1%
同僚	20	2.6%		50代	29	64.4%
その他	39	5.0%		60代	58	64.4%
				70代~	77	78.6%

※各年代のうち、友人・ひとりで来館した割合

5.2.3 本日の来館目的 (n=781)

図12のように、自習・学習目的が225人(28.8%)、本を借りに来た人が147人(18.8%)、貸館利用が120人(18.8%)となっている。

なお、アンケート対象者については、無作為抽出を心掛けたが、高校生の定期テスト期間中であったこと、カフェエリア滞在者への調査は控えたこと、子連れの場合は回答を断られることが多かったことなどから、純粋な来館目的の比率とは差異がある可能性がある。

「子どもを遊ばせに来た」と答えた117人(15.0%)のうちの73%にあたる85人は、調査期間のうちの休日に回答しており、主要年代別及び居住地別の内訳は表2の通りである。

なお、開館から半年足らずの時期に実施した調査であるため、特に海南市外からの来館者は初めての来館

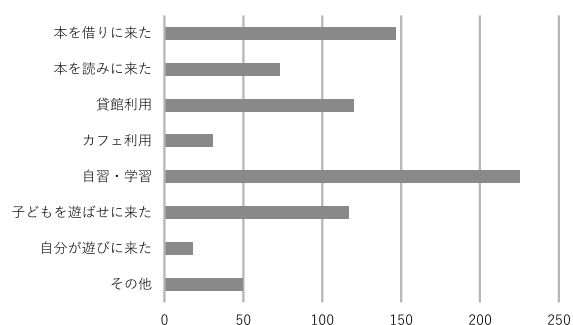


図12 来館目的

表2 「子どもを遊ばせに来た」来館者の主要年代及び居住地別の内訳

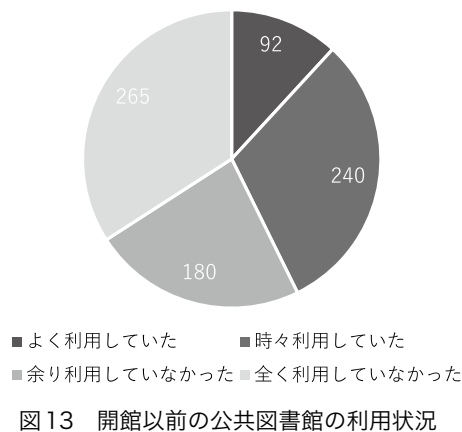
	20代	30代	40代	海南市	和歌山市	その他地域
	18	63	23	41	54	22
週4-5日	11.1%	3.2%	0.0%	4.9%	1.9%	4.5%
週2-3日	5.6%	9.5%	0.0%	19.5%	0.0%	0.0%
週1	5.6%	20.6%	39.1%	31.7%	11.1%	22.7%
月2-3	33.3%	20.6%	30.4%	26.8%	25.9%	18.2%
月1	0.0%	15.9%	0.0%	9.8%	13.0%	4.5%
2-3月に1回	11.1%	6.3%	8.7%	4.9%	11.1%	9.1%
初めて	33.3%	23.8%	21.7%	2.4%	37.0%	40.9%

であるとの回答が多く、この層がリピーター予備軍になっていくものと推測される。

5.2.4 海南nobinosが開館するまでも公共図書館利用していたか (n=777)

図13のように、海南nobinosの開館以前は公共図書館を「あまり利用していなかった」が180人(23.2%)、「全く利用していなかった」が265人(34.1%)で、過半数を占めている。

なお、2章で触れた実利用者数について調査したところ、2020年度末で11,857人(うち海南市内在住者7,695人)が海南nobinos及び下津図書館で図書の貸出を1回以上行っており、2020年度末時点の人口に基づく実利用率は24.10%(市内在住者15.64%)となる^[10]ことから、実利用率は格段に向上したと言え、海南nobinosは「図書館への入口」としての機能を果たしていると言っていることができる。



5.2.5 「本の豊富さ」についてどのように感じるか。(n=698 5段階評価)

回答では、満足と回答した363人(52.0%)、やや満足の168人(24.1%)、普通の150人(21.5%)が97.5%を占めた。これを開館するまでも公共図書館をよく利用していた層と利用しなかった層で比較したところ、表3のとおりとなり、海南nobinosが開館するまでもよく公共図書館を利用していた層においても、蔵書構成について不満を感じている比率に顕著な差は現れていない。

なお、図書館関係者からは、専門書も含めた収集を重視すべきで、蔵書の奥行きが利用者満足度を高めるといった意見が寄せられていたが、一般者向けの公共図書館において、賑わいの創出を目的とする場合は、特別重視する必要がないと言っていることができる。

表3 本の豊富さに関する満足度と開館前の利用頻度

本の豊富さ	公共図書館を			
	よく利用していた	時々利用していた	余り利用していなかった	全く利用していなかった
満足・やや満足	63	163	124	180
531 / 76.1%	74.8%		77.4%	
普通・やや不満・不満	25	51	37	52
167 / 23.9%	25.2%		22.6%	

5.2.6 海南nobinosへ来た理由、良いと思うところ。(n=729 複数回答可)

表4のように、「ゆっくり過ごすことができる」が386人(52.9%)、「清潔感がある」が342人(46.9%)、「スターバックスがある」が333人(45.7%)、「施設のデザインが良い」が325人(44.6%)、「飲食ができる」が242人(33.2%)の順となった。

表4 海南nobinosへ来た理由、良いと思うところ

	回答数	割合
ゆっくり過ごすことができる	386	52.9%
清潔感がある	342	46.9%
スターバックスがある	333	45.7%
施設のデザインが良い	325	44.6%
飲食ができる	242	33.2%
絵本が多い	200	27.4%
家から近い	197	27.0%
子どもが騒いでも気兼ねしない	195	26.7%
新しい本が多い	184	25.2%
駐車場が安い	173	23.7%
蔵書が豊富	134	18.4%
広場・遊具がある	133	18.2%
託児室がある	42	5.8%
貸館料金が安い	42	5.8%

5.2.7 海南nobinos以外によく行く施設

(n=257 ※自由回答/複数記入アリ)

表5のような結果となった。なお、主だった回答をした者の属性を調べたところ、表6~8のとおりであり、以下のような行動形態が推測される。

表6のように、公園等へよく行く層は、30代40代が中心で、海南市及び和歌山市在住の会社員若しくは主婦が多い。主に子どもを連れて遊びに行く先として回答されており、公園へ行ったり海南nobinosへ行ったりという使われ方をしていることが読み取れる。

表7のように、キーノ和歌山へよく行く層としては公園等と同じく30代40代が中心で、和歌山市在住者に多く、学生・会社員・主婦層となっている。図書館を巡る層と、子連れで出掛ける層が重複しているものと推測される。

表8のように、イオンモールへよく行く層としては10代以下、30代、40代の海南市及び和歌山市在住者で、会社員若しくは学生が多く、学生若しくは子連れでの利用が多いものと推測できる。

表5 海南nobinos以外によく行く施設

公園等（わんぱく公園、さぎのせ公園、自然博物館など）	55
キーノ和歌山、和歌山市民図書館	45
買い物（スーパー、スーパーセンターオークワなど）	44
イオンモール	37
その他図書館（下津、県立、ALECなど）	37
飲食店（マクドナルド、ガスト、ドムドムバーガーなど）	20
コンビニエンスストア	19
本屋	9
ラウンドワン、ゲームセンター、プリクラ	8
100均ショップ	6
保健福祉センター、海南医療センター	5
スポーツ施設、総合体育館	5
住民センター、子育て支援センター	4
その他	27

表6 公園等へよく行く層の属性

公園等へよく行く層 (n=55)	~10代	6	海南市	27	学生	5
	20代	2	和歌山市	22	会社員	25
	30代	28	紀美野町	4	自営業	3
	40代	13	有田市	0	主婦	18
	50代	1	県内	2	その他	3
	60代	3	県外	0		
	70代~	2				

表7 キーノ和歌山へよく行く層の属性

キーノ和歌山へよく行く層 (n=45)	~10代	8	海南市	9	学生	11
	20代	4	和歌山市	32	会社員	17
	30代	13	紀美野町	0	自営業	4
	40代	13	有田市	0	主婦	11
	50代	1	県内	4	その他	2
	60代	5	県外	0		
	70代~	1				

表8 イオンモールへよく行く層の属性

イオンモールへよく行く層 (n=37)	~10代	9	海南市	17	学生	9
	20代	3	和歌山市	18	会社員	17
	30代	13	紀美野町	0	自営業	2
	40代	8	有田市	0	主婦	7
	50代	1	県内	2	その他	2
	60代	2	県外	0		
	70代~	1				

5.3 アンケート調査結果の分析

海南nobinosの来館者が多い理由を探るため、「海南nobinosへ来た理由、良いと思うところ」の回答と属

性を分析した。全体的に「ゆっくり過ごすことができる」、「清潔感」が評価されているが、ゆっくり過ごすことができる要因として、インテリア等の「デザイン」のほか、「飲食が可能」で「清潔感」があることが挙げられる。

表9は、性別と各回答を比較したものであるが、女性の方が「絵本が多い」、「デザイン」、「清潔感」に拘っており、「飲食可」についても評価が高い。実際、2階ランチスペースの利用者層は子連れの女性来館者と10代女性が多く見受けられる。

表10は、来館時の同行者と各回答を比較したものであるが、子ども連れの来館者が「清潔感」「子どもが騒いでも気兼ねしない」「絵本の多さ」「広場・遊具があること」を評価している。また、スターバックスへは友人と行っている様子が確認され、「ゆっくり過ごすことができる」点を評価している層は、家族連れと一人での来館者であり、主に2階と4階の館内の使い分けが上手く機能していることが窺われる。

表11は、来館目的と各回答を比較したものであるが、自習・学習目的の来館者は、「施設のデザイン」「飲食できる」「スターバックスがあること」を評価している。海南nobinosでは専門書を置かず、入門書等の親しみやすい図書を中心に蔵書しているが、本を借りる、本を読むなどの図書館利用目的での来館者からも、蔵書に関する不満感は見受けられない。

表12は、一部の特徴的な属性と各回答を比較したものであるが、10代学生は「施設のデザイン」と「スターバックス」を評価している。市内在住の50代以上は「家からの近さ」を評価しており、施設の特性については重視されていない。また、和歌山市からの来館者は「施設のデザイン」の評価が高く、和歌山市を除く他市からの来館者は「スターバックスがあること」を評価している。（調査時点では、スターバックスは海南nobinos店を除き、和歌山県内では、和歌山市及び岩出市以外に出店していない。）

6. 考察

本施設は子どもと子育て中の保護者を主要ターゲットとし、これまで図書館を利用していなかった新規利用者層の開拓による賑わいの創出のほか、来館者の居場所としての居心地の良さ、子育て世代の移住定住に向けたブランディング、市外からの来館者が羨む施設とすることによるシビックプライドの醸成を企図して整備した、図書館機能を中心とする複合施設である。その整備手法として、基本計画策定段階に計画策定から開館後の管理運営までに携わる民間事業者を選定し、

図書館運営に関する専門企業である株式会社図書館流通センターが関わって整備を進めてきた。

人口10万人規模の自治体における公共図書館の中で全国第3位の来館者数となった理由は、これまで図書館を利用していなかった層の来館を新たに生み出したことが主たるものとする。特に10代の学生は施設のデザインとカフェの存在を高く評価しており、これまで近隣になかったお洒落なスポットとして認識しているほか、子連れで来館する層からは清潔感を第一として、子連れでの行きやすさ、特に音を許容する空間であるため子どもが騒いでも気兼ねしない点が高く評価されている。なお、アンケート調査の結果を年代別に見た場合、年齢層の高い来館者は、設備内容やデザイ

ンよりも、利用料金・駐車料金の安さや、家からの近さを重視する傾向にあることが分かった。

基本計画の策定に際して実施したワークショップ等において、本施設整備に当初から関心を抱いていた市民や従来の図書館利用者層、図書館運営の専門企業である図書館流通センターなどから、「公共図書館はこうあるべき」というイメージに基づいた意見が多く寄せられたが、この際、「市民の約1割しか図書館を利用していない」状況であることを把握していなければ、代表的な利用者の声として受け止めてしまっていたかも知れない。

また、各地の先進事例として、図書館流通センターが整備に関わった数か所の図書館へ視察に行ったが、同

表9 性別と海南 nobinosへ来た理由、良いと思うところ

	実数	絵本	蔵書豊富	新しい本	デザイン	託児室	駐車場	貸館料金	清潔感	飲食可	スタバ	子ども騒	ゆっくり	広場遊具	家近
子ども	125	58.4%	19.2%	24.0%	39.2%	15.2%	29.6%	2.4%	62.4%	32.0%	34.4%	62.4%	45.6%	32.0%	26.4%
家族みんなで	121	48.8%	16.5%	30.6%	51.2%	8.3%	26.4%	0.8%	43.0%	34.7%	48.8%	47.1%	60.3%	28.9%	19.8%
友人	230	10.0%	16.5%	22.2%	50.9%	1.7%	12.6%	5.2%	46.1%	39.6%	60.9%	13.0%	52.2%	15.2%	28.7%
ひとり	196	15.8%	20.9%	26.5%	39.8%	2.6%	31.1%	8.2%	43.4%	27.0%	37.8%	10.7%	57.7%	8.7%	30.1%
同僚	19	15.8%	10.5%	5.3%	26.3%	10.5%	26.3%	36.8%	42.1%	21.1%	36.8%	5.3%	21.1%	0.0%	10.5%
その他	38	28.9%	23.7%	34.2%	36.8%	5.3%	23.7%	7.9%	34.2%	31.6%	23.7%	21.1%	39.5%	5.3%	23.7%
全体	729	27.4%	18.4%	25.2%	44.6%	5.8%	23.7%	5.8%	46.9%	33.2%	45.5%	26.7%	52.4%	17.7%	26.5%

表10 来館時の同行者と海南 nobinosへ来た理由、良いと思うところ

	実数	絵本	蔵書豊富	新しい本	デザイン	託児室	駐車場	貸館料金	清潔感	飲食可	スタバ	子ども騒	ゆっくり	広場遊具	家近
本を借りに来た	141	48.9%	33.3%	46.1%	37.6%	7.1%	24.8%	3.5%	45.4%	25.5%	34.8%	29.8%	46.1%	20.6%	30.5%
本を読みに来た	64	15.6%	20.3%	39.1%	31.3%	3.1%	34.4%	1.6%	32.8%	28.1%	25.0%	14.1%	60.9%	9.4%	26.6%
貸館利用	102	15.7%	20.6%	13.7%	38.2%	6.9%	39.2%	25.5%	30.4%	25.5%	46.1%	10.8%	35.3%	7.8%	18.6%
カフェ利用	31	38.7%	16.1%	25.8%	45.2%	9.7%	22.6%	3.2%	58.1%	58.1%	74.2%	22.6%	51.6%	9.7%	22.6%
自習・学習	212	8.0%	13.7%	21.7%	55.7%	1.4%	9.0%	0.9%	50.0%	41.5%	62.7%	11.3%	61.3%	14.2%	28.3%
子どもを遊ばせに	116	56.9%	9.5%	11.2%	47.4%	12.9%	26.7%	0.9%	63.8%	34.5%	37.9%	76.7%	56.0%	38.8%	22.4%
自分が遊びに	18	38.9%	11.1%	27.8%	61.1%	5.6%	16.7%	5.6%	61.1%	33.3%	50.0%	33.3%	44.4%	27.8%	50.0%
その他	45	6.7%	13.3%	17.8%	33.3%	2.2%	35.6%	11.1%	37.8%	22.2%	24.4%	15.6%	51.1%	6.7%	26.7%
全体	729	27.4%	18.4%	25.2%	44.6%	5.8%	23.7%	5.8%	46.9%	33.2%	45.5%	26.7%	52.4%	17.7%	26.5%

表11 来館目的と海南 nobinosへ来た理由、良いと思うところ

	実数	絵本	蔵書豊富	新しい本	デザイン	託児室	駐車場	貸館料金	清潔感	飲食可	スタバ	子ども騒	ゆっくり	広場遊具	家近
10代 学生	209	10.0%	13.9%	27.8%	57.4%	1.0%	5.7%	2.4%	46.9%	42.6%	66.5%	12.4%	55.5%	20.6%	33.0%
20-40代 女性 子どもor家族と	142	59.2%	17.6%	24.6%	44.4%	13.4%	27.5%	0.0%	63.4%	38.7%	40.8%	62.7%	54.2%	38.0%	23.9%
20-40代 女性 子どもを遊ばせに来た	72	58.3%	6.9%	11.1%	44.4%	13.9%	26.4%	0.0%	75.0%	43.1%	38.9%	83.3%	55.6%	47.2%	29.2%
50代以上 海南市内	113	16.8%	23.9%	27.4%	23.0%	4.4%	27.4%	8.8%	38.1%	23.9%	28.3%	16.8%	51.3%	7.1%	43.4%
和歌山市	247	36.4%	15.0%	26.7%	55.1%	8.9%	28.3%	7.3%	49.0%	32.0%	42.9%	35.2%	52.6%	20.6%	14.2%
市外(和歌山市除く)	117	22.2%	13.7%	17.1%	47.9%	5.1%	18.8%	6.8%	48.7%	33.3%	54.7%	22.2%	49.6%	16.2%	6.0%
全体	729	27.4%	18.4%	25.2%	44.6%	5.8%	23.7%	5.8%	46.9%	33.2%	45.5%	26.7%	52.4%	17.7%	26.5%

表12 一部属性と海南 nobinosへ来た理由、良いと思うところ

	実数	絵本	蔵書豊富	新しい本	デザイン	託児室	駐車場	貸館料金	清潔感	飲食可	スタバ	子ども騒	ゆっくり	広場遊具	家近
男性	253	20.2%	16.2%	24.9%	38.3%	4.0%	25.3%	7.1%	41.5%	26.1%	42.7%	21.7%	54.2%	13.4%	24.9%
女性	465	31.8%	19.6%	25.4%	47.5%	6.7%	23.2%	4.9%	49.5%	36.8%	46.5%	29.9%	51.6%	20.2%	27.5%
全体	729	27.4%	18.4%	25.2%	44.6%	5.8%	23.7%	5.8%	46.9%	33.2%	45.5%	26.7%	52.4%	17.7%	26.5%

社が販売代理店となっている自動貸出機や書籍消毒器等の機器が数多く導入されているものの、実際に利用され好評であるといった印象を受けることはなかった。施設の設計段階においても、同社営業担当者からはこれらの機器や什器を強く推奨されるだけで、来館者増に繋がるノウハウがあるようには感じられなかった。

5章で得られた結果から、本施設においては、図書館としての機能や機器等の設備の充実よりも、施設としてのデザイン性や清潔感が来館に繋がっていることが明らかであり、自治体側にオーソドックスな図書館を整備したいという意思がないのであれば、専門企業の関与は逆効果となる可能性があるため、注意が必要だと考える。

施設設計においては、居場所としての居心地の良さや子連れで行きやすいというイメージの具現化など、市が考える施設整備のコンセプトを設計事務所やデザイナーに伝えるだけでなく、敢えて「図書館関係者からあんなのは図書館じゃないと言われたい」「ライバルはショッピングモール」といった言葉を使うことで、明確に共有できるよう注力した。公共施設の整備においては、前例に則り無難な設計に陥りがちであるが、まさにその点が「公共施設はダサイ」と言われる要因である。本施設は「賑わいの創出が最大の目的」という免罪符があったため、設計事務所やデザイナーの柔軟な発想を促し、「図書館はこうあるべき」といった固定観念にも捉われず整備を進めることができた。

カフェ運営事業者については、公募の結果、スターバックス コーヒー ジャパン株式会社が選定されたが、同社の出店が高く評価されている点は地方都市特有の「都会への憧れ」の表れと言える。このような点は、都会に軸足を置いて活動している設計者やデザイナーでは汲み取ることができない感覚であり、デザインに対する感覚も含め、市民の感覚をよく知る設置主体の地方自治体がコントロールしなければならない。

また、先述の日本の伝統色や形状によるデザイン意図の共通言語化のほか、本稿では触れていないが図書検索システムの操作画面にも同じデザインを取り入れたこと、開館後の貼り紙を一切排除した運営、デザイナーによる定期的な館内の巡回確認など、細かな部分でデザインクオリティの維持に努めていることなども来館者の評価に繋がっていると思われる。

施設開館後、本施設周辺の通行量調査によると、開館前に比べて151%の歩行者及び自転車の通行量増加が確認されている（駅からの歩行者通行量については対前年比210%）^[11]。その変化の最大の要因は、学校帰りの高校生らがJR海南駅で途中下車し、自習等で本施

設を利用しているためと推測される。ただし、開館が2020年6月であり、新型コロナウイルスの蔓延によって外出自粛が叫ばれた時期であったことからJR海南駅の乗降客数が増加したことを示すデータは得られていない。

なお、歩行者通行量は増えたものの、周辺商店街の空き店舗などに目立った変化は生じていない。集客力のある施設の整備により、周辺商店街の活性化を目指すのであれば、別途並行して、イベントや空き店舗対策事業などを実施すべきであろう。

結論として、公共施設の整備においては、他市の事例や専門企業の助言を参考にし、市民の意見集約結果を踏まえて進めることが一般的であるが、担当課や担当者がこれらを拠り所としてしまい、自ら考えることなく、責任と整備内容の決定の根拠を第三者の意見に委ねる結果となってしまってはならない。

専門企業からの助言については、当然、参考になるものもあるが、妄信するのではなく、背後の利害関係、エビデンスを精査し、懐疑的な視点を持って検討しなければならない。市民の意見を集める際にも、従前からの施設利用者だけを対象とするのではなく、利用しない理由にも注目して意見を聞くべきである。様々な意見や考えを把握し、限られた予算の中で整備内容に優先順位を付け、必要なものを取捨選択するのは、整備主体である地方自治体の責任において行わなければならない。その際、客観的な意見を取り入れ、また自身の考えを整理するためにも、大学関係者など幅広くヒアリングを行うことも有効と言える。なお、いずれの場合においても「こうあるべき論」には注意しなければならない。むしろ、これを否定することから検討を始めることで、新たな視点が開けることもある。

なお、本施設は図書館を核とした複合施設であるが、図書館に対しては、大多数の人が「本が整然と並んだ静かな空間」という共通したイメージを抱いているため、イメージを覆しやすく、また同時に、約1割の市民しか利用していない施設であったことから、多くの非利用者層を引き込み、爆発的に来館者数を増加させることが可能であった。

課題としては、大きな事業であればあるほど、議会等からの注目を集めることとなり、議会に対する説明責任を負う自治体職員の立場からすれば、専門企業の助言を踏まえた無難な設計の方が、波風を立てずに受け入れられやすいという事実が挙げられる。これに対しては、丁寧且つ精細な説明を繰り返すほかなく、そのためにも施設整備のコンセプトをしっかりと明確化しておく必要がある。

また、整備の途中で担当者が異動し、得られた知見やコンセプトが十分に引き継がれないケースや、検討が不十分で抽象的な計画を引き継ぎ、山積する課題の解決に迫られるケース、複合施設の場合に複数の担当課が関わり、それぞれの立場の違いから温度感の共有が十分にできないケースなども地方自治体ではありがちであるため、公共施設の整備に際しては、一貫性を意識した体制の構築が必須と言える。

参考文献

- 1) 海南市『(仮称)市民交流施設整備基本計画』2017年3月
- 2) 公益社団法人日本図書館協会『日本の図書館 統計と名簿 電子媒体版 統計編2021』2022年4月
- 3) 北嶋武彦編著『現代図書館学講座 14 図書及び図書館史』1988年8月
- 4) 海南市『海南市庁舎跡地活用基本方針』2016年3月
- 5) DICグラフィックス『DICカラーガイド 日本の伝統色 第9版』2018年

注

- [1] 住民基本台帳人口（海南市総務部市民課）2016年3月31日時点
<https://www.city.kainan.lg.jp/kakubusho/soumubu/kanzaijohoka/opendata/1519107324813.html>
(2022年9月20日閲覧)

- [2] RESAS地域経済分析システムより抽出した海南市、及び海南市と和歌山市の合算データ。
<https://resas.go.jp/>
- [3] アートディレクション・サインデザイン・ロゴデザイン：廣村デザイン事務所，インテリアデザイン・既製品家具選定：藤森泰司アトリエ，ランドスケープデザイン：スタジオゲンクマガイ（植栽計画：TREEFORTE），遊具デザイン：ELEVENCE
- [4] 株式会社図書館総合研究所調べ。
- [5] 海南 nobinos 図書館機能資料収集方針
- [6] DICグラフィックス株式会社の著作物である色見本帳「DICカラーガイド」を参照しまたは準拠して作成した印刷物等で、同社の認定・使用許諾を受けたもの。建物として初めての認定であることを示す「A01」の番号が付与されている。
- [7] 本施設近くに市の子育て支援センターが設置されていることや、ファミリーサポートセンターとの棲み分けを踏まえ、本施設における「子育て支援機能」については、子育て中の保護者が本施設利用時にひと息つくことができる環境を提供することとした。
- [8] 海南市教育委員会生涯学習課調べ。
- [9] 2019年度実績。[8]と同じ。
- [10] [8]と同じ。2015年度の実利用率は11.07%（市内在住者は9.85%）。
- [11] 海南市まちづくり部産業振興課調べ。2021年3月26日（金）実施の商店街通行量調査。